

新刊書紹介

脱・環境ホルモンの社会

吉村 仁・竹内浩昭・中桐齊之著

三学出版 (2002年)/B5判, 160頁, 1800円

わが国において、環境ホルモンが世間の注目を浴びてからすでに数年が経過した。この間、水産学の分野でも生物、食品あるいは海洋環境に関わる多くの研究者が環境ホルモン汚染の問題に取り組んでおり、その成果は学会、シンポジウムおよび研究集会などで積極的に公表されてきた。もちろん、医学、薬学、環境毒性学、環境工学などの分野を加えると、環境ホルモンに関連した研究成果は膨大な量になる。しかし、これまでの研究を総括し現在の環境を改善するための新規研究や、そのような視点に立った解説書は決して多いとはいえない。ここに紹介する、「脱・環境ホルモンの社会」は環境ホルモン汚染の現状ばかりではなく、その背景となる生物学的あるいは社会的情報にもふれ、環境ホルモン社会からの脱出に視点を置いた興味ある一冊である。したがって、本書は環境ホルモンの生物に対する影響を知らしめることに主眼をおいてはいない。むしろ、環境ホルモンの問題を通して人間が他生物と共存することの意味を考え、今後どのように社会を維持していくかについて考える機会を提供することに本書の価値があるよう様に見える。

本書には水生生物における環境ホルモン汚染の実態やそれを考える上で必要となる生物学的背景についての記載も多い。特に環境ホルモンによる魚類の性の攪乱を理解するためには、魚類の性の曖昧さを生物学的に必ず理解しておかねばならないが、この問題が詳しく解説されている。この項は本学会の会員である小林牧人氏が執筆しており一読に値する。しかし、野生生物やヒトへの影響などに関する最新の研究成果の記載は決して十分なものではなく、近年出版された多くの専門書にくらべやや貧弱である。また、環境ホルモン問題を様々な視点で幅広くとらえているため、一つ一つの問題に対する掘り下げは十分であるとはいえない。これまでの環境ホルモン解説書と異なり、自然科学から人間科学にまで話題を広げているため、限られたスペースの中では深い論議を期待できないとはいえ、もう少し最新の動向を拾えなかったらどうか。この様に本書に対する要望はあるものの、環境ホルモン問題を改めて考え直すきっかけとなる一冊である。 (長大水 征矢野 清)

水産環境の科学

成山堂書店 (2002年)/A5判, 180頁, 2,800円

水産業が持つ多面的な環境保全機能が認識されるにつれて、健全な水域を保全することは安全でおいしい食糧を生産するだけでなく人類の生存にとっても不可欠であることが広く理解されてきた。本書はこうした背景のもとに水産大学の教官ないしは関連教官によって水圏環境科学に関わる話題をオムニバス形式で紹介したものである。

全体は八章に分かれ、順に「水の不思議をミクロの目で調べる」、「海中の光」、「リモートセンシングによる潮汐・海流の推定」、「小さな大洋—日本海の不思議—」、「海洋拡散現象—海水中の汚濁物質やプランクトン群—」、「砂浜の生態と保全」、「内湾水域の物質循環と水産増養殖」、「餌生物の海洋環境と日周鉛直移動」と題された章のそれぞれが完結し独立している。各章は、はじめにキーワードにより概要が提示され、図表を多用し、親しみやすい例示を盛り込むなど読者の理解を図る工夫がされており、興味深い話題に満ちている。例えば第四章「小さな大洋」は読み物として良く纏められており高度な内容が平易な記述で表され、日本海における海水循環研究の面白みと地球温暖化問題における位置が明瞭に伝わる。また、第五章「海洋拡散現象」ではシアー拡散が丁寧に説明されており従来の物理学の教科書にはない具体的な記述により、生物系の読者にも十分分かりやすいものとなっている。第六章「砂浜の生態と保全」では限られた紙面にも拘わらず砂浜の生態学を要領よく整理し、砂浜の保全における生態学研究の必要性を示している。第七章「内湾水域の物質循環と水産増養殖」では三陸の大船渡湾における研究事例をもとに養殖環境における物質循環理解の必要性を具体的に説いている。

しかしながら章によっては専門用語や数式が不十分な説明のままに使われていて引用文献からだけでは理解を得ることが難しい記述があり、その分野の大学院生や研究者でない読者にとっては助言者が必要と思われる。また、章によっては水産環境との関連性が分かりづらい節があり、本書が学部学生や院生に対する講義や演習の副読書としてのねらいを持って書かれていることをうかがわせる。こうした難点はあるが全体として本書は水産・海洋関連の読者にとっておもしろい読み物となっており、水産環境を俯瞰する手引きとなっている。

(東京大学大学院農学生命科学研究科 古谷 研)